

修士論文（要旨）

2024年1月

大学生の同調行動とソーシャルスキルおよび適応感との関連

指導 井上 直子 教授

国際学術研究科

国際学術専攻

心理学実践研究学位プログラム 臨床心理分野

222J2010

野末 みのり

Master's Thesis (Abstract)
January 2024

The Relationship between Conformity Behavior, Social Skills, and Subjective Adjustment
in University Students

Minori Nozue
222J2010
Master of Arts Program in Clinical Psychology
Master's Program in International Studies
International Graduate School of Advanced Studies
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目次

第1章	問題と目的	1
1.1	青年期の友人関係の意義	1
1.2	友人関係の発達的变化	1
1.3	現代青年の友人関係の特徴	2
1.4	同調行動と適応	2
1.5	ソーシャルスキルについて	3
1.6	ソーシャルスキルと対人関係	4
1.7	本研究の目的と研究意義	5
第2章	方法	5
2.1	調査対象者	5
2.2	調査期間	6
2.3	手続き	6
2.4	Web形式の調査票の構成	6
2.5	分析方法	7
2.6	倫理的配慮	7
第3章	結果	8
3.1	回答者の属性	8
3.2	各尺度における性差と学年差の検討	8
3.3	各変数の関連	10
3.4	同調行動とソーシャルスキルおよび適応感の関連	11
第4章	考察	13
4.1	仮説1について	13
4.2	仮説2について	14
4.3	仮説3, 4について	14
4.4	各尺度の性差・学年差について	15
4.5	総合考察	16
第5章	今後の課題	17

謝辞

引用文献

資料

第1章 問題と目的

青年期は自己確立の時期であり、その過程において、友人と互いの価値観を語り合い親密な関係を構築することが重要となるが、現代大学生は友人関係において互いに傷つけることを避け、表面的な楽しさを求める傾向があり、周りから浮くことを避けるべく他人に同調する者が増えていることが指摘されている。

従来、同調行動については、社会的な適応を促進するといったポジティブな側面が多く報告されてきたが、同調性の高い友人関係を持つ者は適応感が低い（石本・久川・斎藤・上長・則定・日潟・森口，2009）というネガティブな側面も報告されている。同調行動には、内心から他者の言動を受け入れる「内面的同調」と、表面的には同調しているように見えるが内面では異なっている「表面的同調」があり、他者意見が自分のものと異なる場合に自分を意見を抑えて他者に合わせる「表面的同調」をとることで葛藤が生じ、内的な適応が損なわれている可能性があると考えられる。

こうした問題の背景には青年のソーシャルスキルの未獲得や不足があると考えられ、ソーシャルスキルが低い者は、対人関係を回避することによって、他者からの拒絶や衝突を防ぎ、自分を守っていること（渡部，1999）、同調行動をする者は社会的スキルが不足しており、劣等感が高いことが示されている（桜井，1993）。

これらのことから、ソーシャルスキルが低い者は同調行動をとることにより、外的な適応はできていると考えられる一方で、周囲の意見と自分の意見が異なる場合に、自分の意見を抑えて他人に合わせることにより、ストレスを感じ、内的な不適応に陥る可能性が高いと考えられる。また、傷つけ合うことを恐れ、表面的な友人関係を築く傾向がある現代の大学生においては、友人との衝突を防ぐために、自分の本音を抑え、表面的同調をすることが考えられる。そこで本研究では、友人関係における表面的同調に焦点を当て、ソーシャルスキルおよび適応感との関連について検討し、大学生の適応感を高めるために貢献する要因を明らかにすることを目的とする。また、性差や学年差についても探索的に検討を行う。現代大学生の対人関係の特徴を理解することで、円滑で適応的な対人関係を構築するための心理学的援助の一助となることが期待される。

第2章 方法

2.1 調査対象者

本研究の調査協力依頼に同意を得られた都内私立大学生（18～24歳）の男女300名を調査対象者とした。

2.2 Web形式の調査票の構成

(1) 表紙

調査の趣旨や調査協力依頼の旨、倫理上の配慮等を含んだ説明文。

(2) 対象者に関する項目（年齢，性別，学年）

研究対象として設定した 18～24 歳の大学生であるかどうかを確認するための年齢，性差や学年差の検討に必要な性別，学年についての記入欄。

(3) 同調行動尺度(19 項目)

高校生を対象に作成された葛西・松本(2010)の同調行動尺度を，五十嵐・野村・岩崎(2014)が大学生の同調行動傾向の測定に適した項目に修正したものを使用した。この尺度は，「内面的同調」との関連が深い「仲間への同調」因子（9 項目）と，「表面的同調」との関連が深い「自己犠牲・追従」因子（10 項目）の 2 因子（計 19 項目）から構成される。

(4) 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度短縮版（20 項目）

吉良・尾形・上手(2020)による成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の短縮版を使用した。この尺度は，「コミュニケーション・スキル」と「対人スキル」の 2 つの側面からなる。「コミュニケーション・スキル」の側面としては，汎状況的に個人が相手に自らの意思を伝えるのに必要な「記号化」（3 項目），個人が相手の意図を受け取るのに必要な「解読」（3 項目），コミュニケーション過程において個人内に生じる感情に対処するのに必要な「感情統制」（4 項目）の 3 つがある。「対人スキル」の側面としては，初対面の人同士が出会ったときに必要な「関係開始」（3 項目），すでにできあがっている対人関係を維持するのに必要な「関係維持」（4 項目），相手の意思を尊重しながらも，自分の意思を抑えることなく相手に伝える「主張性」（3 項目）の 3 つがあり，6 因子（計 20 項目）から構成される。

(5) 大学生用適応感尺度（29 項目）

大久保・青柳(2003)が作成した大学生用適応感尺度を使用した。この尺度は，個人と環境の適合性の視点から個人の主観的適応を測る尺度である。「居心地の良さの感覚(10 項目)，「被信頼感・受容感」(6 項目)，「課題・目的の存在」(7 項目)，拒絶感のなさ(6 項目)の 4 因子(計 29 項目)から構成される。

第3章 結果と考察

各尺度において，性別と学年による 2 要因分散分析を行った結果，同調行動尺度の「自己犠牲・追従」で有意な交互作用が見られ，女性において，学年の主効果が有意であり，3 年生よりも 2 年生のほうが有意に得点が高く，2 年生において，性別の主効果が有意であり，男性よりも女性のほうが有意に得点が高かった。また，ソーシャルスキルでは，「解読」，「記号化」は男性より女性のほうが有意に得点が高く，「主張性」，「感情統制」は女性より男性のほうが有意に得点が高かった。加えて，適応感尺度では，「居心地の良さの感覚」「被信頼感・受容感」「課題・目的の存在」のいずれも男性より女性の方が有意に得点が高かった。男性は他者と自分は異なる存在であると捉え，自分の意見を主張する傾向が強いのに対し，女性は周りからどのように思われているのか気にしたり，他者と円滑な関係を築くことを重視したりといった傾向が強いため，周りに合わせる行動をとりやすいのではないかと考えられる。特に，大学 2 年生は，新しい友達との良好な関係性を保つことが重要になってくると

思われるため、新しい環境での社会的な適応を得るために、同調行動をとることが多くなることが示唆された。

各尺度の相関分析を行った結果、ソーシャルスキルの「関係開始」「主張性」は、同調行動の「自己犠牲・追従」と弱い負の相関を示した。主張性スキルは、相手の意思を尊重しながらも、自分の意思を抑えることなく相手に伝えることとされている（相川・藤田，2005）。このスキルが不足している場合、自分の意見を相手に受け入れてもらえるように伝えられる自信がなかったり、自分の意見よりも他者の意見を尊重してしまったりするため、自分の意見を抑えてしまうのではないかと考えられる。また、同調行動の「自己犠牲・追従」は、適応感の「被信頼感・受容感」「課題・目的の存在」「拒絶感のなさ」と弱い負の相関を示した。自分が受け入れられていないと感じる関係においては、周りとは違う意見を言うことで相手から否定的な反応をされる可能性があるため、他者の意見に合わせる傾向が高まると予想される。一方で、周りから無条件に受け入れられ、安心できる関係性のなかでは、ありのままの自分の意見や考えを出しやすいのではないかと考えられる。

最後に、ソーシャルスキルが同調行動の「自己犠牲・追従」を介して適応感に至るパスが存在することを仮定し、共分散構造分析によるパス解析を行った結果、ソーシャルスキルから自己犠牲・追従に有意な負のパス、自己犠牲・追従から適応感にも有意な負のパス、ソーシャルスキルから適応感へは有意な正のパスが示された。ソーシャルスキルが低いと表面的同調行動をとる傾向が高く、自分の意見や考えを主張せず他者に合わせることで、他者との関係を円滑に保ち、一時的な安心感を得ることができ、社会的な適応感をもたらすのではないかと推察される。一方で、自分の本当の価値観や意見を抑えて他者に合わせすぎてしまうことで、ストレスや不満が生じ、内的適応感の低下に繋がるのではないかと考えられる。特に本研究では、「主張性」や「関係開始」など、自己主張したり、他者に自分から話しかけたりといった対人スキルが低いと、自分の意見や感情を積極的に他者に伝えることが難しく、我慢することが増え、内的な不調和が生じやすいことが推察された。このことからソーシャルスキルを獲得し適応感を高める過程において、他者の気持ちを汲み取りながら、より積極的に他者と関わり、自分の気持ちを表現したり、自分の考えや意見を主張できるようになったりすることが重要であることが示唆された。

引用文献

- 相川充 (1996). 社会的スキルと対人関係 誠信書房.
- 相川充・藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要 第1部門, 56, 87-93.
- 安達知郎 (2013). 子どもを対象としたソーシャルスキル尺度の日本における現状と課題—ソーシャルスキル教育への適用という視点から 教育心理学研究, 61, 79-94.
- 雨宮処凛・萱野稔人(2008). 「生きづらさ」について 光文社.
- 大坊郁夫 (2008). 社会的スキルの階層的概念 対人社会心理学研究, 8, 1-6.
- 土井隆義 (2008). 友達地獄「空気を読む」世代のサバイバル 筑摩書房.
- 榎本 淳子 (1999). 青年期における友人の活動と友人に対する感情の発達変化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 藤原正光(2006). 「同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み(1)—大学生による小5時代の回想から—」 文教大学教育学部紀要, 40, 1-9.
- 平木典子 (2009). 改訂版 アサーション・トレーニング—さわやかに自己表現>のために— 金子書房.
- 保坂亨・岡村達也 (1992). キャンパス・エンカウンター・グループの意義とその実施上の試案 千葉大学教育学部研究紀要, 40, 113-122.
- 保坂亨 (2010). いま, 思春期を問い直す—グレイゾーンにたつ子どもたち 東京大学出版.
- 五十嵐透子・野村珠紀・岩崎眞和(2014). 大学生の同調行動と文化的自己観および大学適応感との関連 上越教育大学研究紀要, 33, 105-114.
- 石本雄真・久川真帆・斎藤誠一・上長然・則定百合子・日潟淳子・森口竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 20, 125-133.
- 石津憲一郎・安保英勇 (2007). 中学生の抑うつ傾向と過剰適応—学校適応に関する保護者評定と自己評定の観点を含めて— 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 55, 271-288.
- 金間大介(2022). 先生, どうか皆の前でほめないで下さい—いい子症候群の若者たち— 東洋経済新報社.
- ケイン聡一・小池真由・中島健一郎(2020).同調行動研究のこれまでとこれから—動機に着目する必要性— 広島大学心理学研究, 20, 121-132.
- 葛西真記子・松本麻里 (2010). 青年期の友人関係における同調行動: 同調行動尺度の作成 鳴門教育大学研究紀要, 25, 189-203.
- 経済産業省 (2010). 大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査.
- 吉良悠吾・尾形明子・上手由香 (2020). 青年のソーシャルスキルにおける汎状況的なスキルと具体的な対人場面でのスキルとの関連性の検討 教育心理学研究, 68, 11-22.
- 北村晴朗 (1965). 適応の心理 誠信書房.
- 牧野幸志 (2012). 青年期におけるコミュニケーション・スキルと友人関係—同性・異性友人に対するコミュニケーション・スキルの性差・学年差の検討— 経営情報研究, 20, 17-32.
- 松井豊 (1990). 友人関係の機能「青年期における友人関係」斎藤耕二・菊池章夫 (編著) 社

- 会科の心理学ハンドブッカー人間形成と社会と文化― 川島書店, pp.283-296.
- 中間玲子 (2014). 青年期の自己形成における友人関係の意義 兵庫教育大学研究紀要, 44, 9-21.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 岡田努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 大久保智生・青柳肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み―個人-環境の適合性の視点から― パーソナリティ研究, 12, 38-39.
- 大久保智生 (2004). 新入生における大学環境への主観的適応に関する PAC (個人別態度構造) 分析 パーソナリティ研究, 13, 44-57.
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因―青年用適応感尺度の作成と学校別の検討― 教育心理学研究, 53, 307-319.
- 坂本剛 (1999). 中学生の学級集団における同調行動と適応についての一研究 名古屋大学教育学部紀要, 心理学, 46, 205-216.
- 坂本剛 (1999). 同調行動が適応に及ぼす影響―社会的適応と内的適応の視点を中心として― 名古屋大学教育学部紀要, 心理学, 46, 307-308.
- 桜井茂男 (1993). 児童用セルフ・モニタリング尺度の作成 実験社会心理学研究, 33, 78-84.
- 佐藤有耕 (1996). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, 3, 11-20.
- 関口奈保美・三浦正江・岡安孝弘 (2011). 大学生におけるアサーションと対人ストレスの関連性: 自己表現の3タイプに着目して ストレス科学研究, 26, 40-47.
- 白井利明 (2006). 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴―変容確認法の開発に関する研究 (Ⅲ) ― 大阪教育大学紀要 第IV部門: 教育科学, 54, 151-171.
- 杉浦和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し 発達心理学研究, 9, 45-55.
- 水津孝紀・児玉真樹子 (2016). ソーシャルスキルが友人および教師との関係, 学業を媒介して学級適応感に及ぼす影響: 高校生を対象として 学習開発学研究, 9, 37-44.
- 田島祐奈・山崎洋史・岩瀧大樹 (2015). 青年期における対人欲求および同調行動に関する研究 学苑・人間社会学部紀要, 892, 105-111.
- 高垣忠一郎 (1988). 自分をつくる心理科学研究会 (編) かたりあう青年心理学 青木書店, pp.55-82.
- 田村茉菜 (2017). 青年期の両親への信頼感・性別が対人欲求 及び同調行動に与える影響について―大学生を対象に― 東京国際大学大学院心理学研究科紀要, 53-78.
- 戸川行男 (1956). 適応と欲求 金子書房.
- 和田実 (1996). 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, 67, 232-237.
- 渡部玲二郎 (1999). 対人関係能力と対人欲求の関係 心理学研究, 70, 154-159.
- 山田みき・岡本祐子 (2007). 「個」と「関係性」からみた青年期のアイデンティティに関する

る研究の動向と展望 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 人間科学関連領域, 56, 199-206.

横田晋大・中西大輔 (2011). 同調志向尺度の作成—規範的影響と情報的影響— 広島修大論集, 51, 23-36.